令和５年５月１日

あきる野市議会議長　殿

会 派 名　くさしぎ
代表者名　辻よし子

会派の（ 調査研究 ・研修 ）報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1　調査研究または研修実施日	令和５年４月28日（木）
2　調査研究または研修の場所	大阪市立茨田中学校
3　調査研究事項または研修名	中学校カフェ「まんだるーむ」の運営について
4　参加者氏名（　　1　名）	辻よし子
5　調査研究または研修の概要及び感想等	別紙のとおり

（別　紙）

【視察の概要】

大阪市立茨田中学校において、元気アップ事業「まんだるーむ」(校内カフェ)の活動を視察した。

活動の開始前に、大阪市立茨田中学校の渡邉哲朗校長及びNPO法人FAIRROADの阪上由香代表、栗本正則副理事から活動開始の経緯や目的についてお話を伺った（大阪市教育委員会事務局の石田耕一指導主事が同席)。

1.活動の経緯

大阪府立高校では教育委員会が委託事業として校内カフェを進めているが、中学校においては、未だ教育委員会全体としての取組にはなっておらず、各校長の裁量で実施している。

渡邉校長は、大阪府立高校の校内カフェの取組や、市内中学校で最初に事業を取り入れた大阪市立市岡中学校（港区）での取組を知る中で、事業の意義を感じ、導入を決断したとのことだった。学校の教育活動にNPO法人という外部組織が関わることに抵抗感を持つ教職員は少なくないようだが、茨田中学校の教職員からは、特に反対の声は無かったという。渡邉校長としては、外部組織との関わりによって教職員の負担感が増すことがなければ、むしろ学校は積極的に外部組織に助けを求め、協力を得ていくべきであるとの考えを持っているとのことだった。

一方、本事業を導入するために、学校には独自の予算が充分あるわけではない。そうした中、本事業は、文科省の学校元気アップ事業に位置付けて行われている。NPO法人FAIRRODOが委託を受け、スタッフは個人で学校と契約を結ぶ形を取っている(時給1,200円)。また、地域活動協議会、PTA等との連携も大切にしているとのことだった。

スタッフは特に気になる生徒の様子に気づいた場合には、生徒との信頼関係に配慮しながら、学校と情報共有をしている。また、教師の中には、時々、活動中に顔を見せる教師もいるが、その時には「先生」としてではなく接してもらうようにしている。教室とは少し異なる「素顔」の先生と話せることを喜ぶ生徒も少なくないと言う。

2. 活動の目的

「まんだるーむ」は、毎週1回昼休みと放課後に行われている。出入り自由で、理由があってもなくても気楽に訪れることができる居場所であり、「まんだるーむ」にいるだけで、クラスや学年、部活動を超えて人間関係が広がっていく。「学校になじめなくても、勉強が苦手でも、人間関係に不安があっても問題ない、大丈夫」と思えるようになる場所を目指し、多様な出会いと情報を提供する場である。

スタッフとして大切にしていることは、生徒たちが安心して自由に過ごせる場にすることである。強制的に何かを求めたり、一方的に価値観や規範を押しつけたりすることはなく、生徒たちがそのような印象を受けないように配慮している。同時に、生徒間で喧嘩やトラブルが生じた際には、スタッフが適切に対応し、「まんだるーむ」を利用する生徒たちみんなが気持ち良く過ごせる場を保障している。

3. 校内カフェに参加して

視察当日は、家庭訪問と重なって午前授業であったため、昼休みの「校内カフェ」はなく、放課後の13時から16時過ぎまで行われた。

場所は図書室を利用し、各テーブルに将棋、オセロ、ドミノ用の積み木、カードゲーム、絵を描く道具、けん玉などが置かれ、テーブルクロスや入り口のミニ看板などで明るく楽しい雰囲気づくりがされていた。

13時過ぎから、生徒たちが集まり始め、スタッフとの会話や友達同士のおしゃべりが自然に始まり、徐々に賑やかな雰囲気になっていった。 三々五々集まって来る生徒たちに、スタッフが一人一人声をかけ、活動中はさりげなく子どもたちの中に入っておしゃべりをしたり、遊びの相手をしながら、子どもたちの様子を丁寧に見ている姿が印象的だった。終わりの時間が過ぎてもなかなか帰ろうとせずに友達との遊びに興じている男子生徒たち、スタッフと話し込んでいる女子生徒、最後までスタッフの片付けを手伝う生徒の姿などがあり、この場所が生徒たちにとって居心地の良い大切な場になっていることが感じ取られた。

【感想】

不登校になる子どもたちの数は年々増え、その理由がはっきりしないケースも少なくない。その背景には、現代の子どもたちが目的や規範を持った活動の中で管理されることが多く、常に緊張を強いられているからではないだろうか。「まんだるるーむ」の活動は、ある意味、たわいもない単なる自由空間に過ぎないが、そうした「遊び」の時間と空間が現代の子どもたちには必要とされているように思う。

一方、「まんだるーむ」の中で、誰もが安心して自由な時間を過ごせるようにするためには、「まんだるーむ」の中で起きる小さないざこざを、スタッフが上手に交通整理する必要がある。禁止や規制ではなく、その場をどう収めるか、経験に基づく力量が必要だと改めて感じた。

今後、この活動を各地で広げていくためには、活動の意義を理解し、受入れに応じる学校を増やしていくことと、経験を積んだスタッフ並びにボランティアとして関わる地域の協力者を確保することが主な課題と言えよう。

2023年
4～5月
まんだ
るーむ